

○棚田オーナー制度、交流事業、特産品販売等バランス良く実施し、新规定住者の獲得につなげている。

基本情報

- 所在地：京都府福知山市大江町毛原（大江山口内宮駅から徒歩で約15分）
- 枚数：約600枚
- 耕作面積：7.5ha
- 耕作率：88%
- 標高範囲：100～200m
- 平均勾配：1/10
- 法面の構造：土羽、石積み
- 開発起源：平安時代以降
- 水源：谷川水
- 保全団体：毛原の棚田保全事業部
- 棚田オーナー制：10組程度（H10～）
- 選定：日本の棚田百選（H11）、京都府景観資産（H20）、重要里地里山（H27）

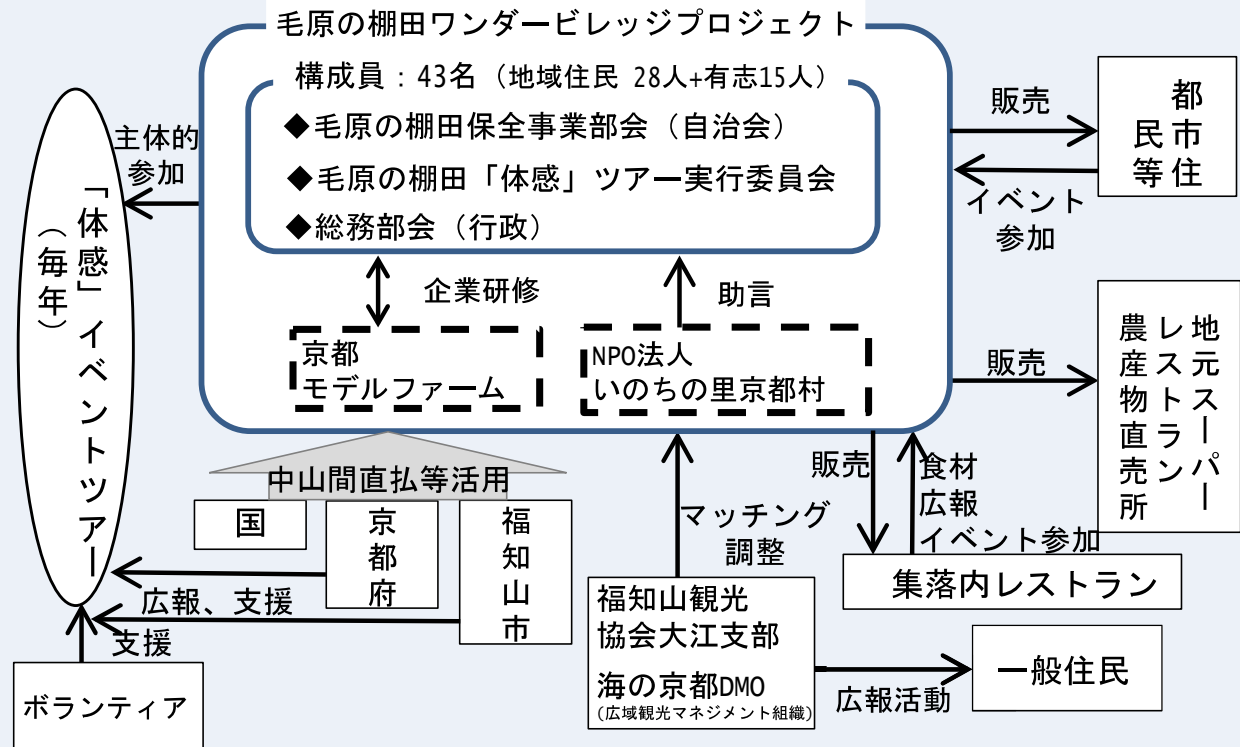


棚田「体感」ツアー

地区の特徴、取組効果

- 集落の話し合いを経て、平成9年から棚田の景観を生かした棚田農業体験ツアー（現在の毛原の棚田「体感」ツアー）を開始（参加人数 毎年140人）。翌年から棚田オーナー制度をスタート。
- 棚田米を使用した純米吟醸酒やどぶろくを特産品として販売。近年は地元農産物加工を行う棚田食品加工所（毛楽里）のクラウドファンディングを活用した建設、ピザ窯の設置などを進め、事業を拡大。ボランティア活動の報酬として地域通貨（けーら）の発行も開始した。新规定住者（8人）や新規就農者（5人）を迎え入れ、自立できるシステムづくりに挑戦している。

棚田保全をめぐる関係図



キーワード

地域内体制整備

棚田米販売

移住促進

オーナー制度

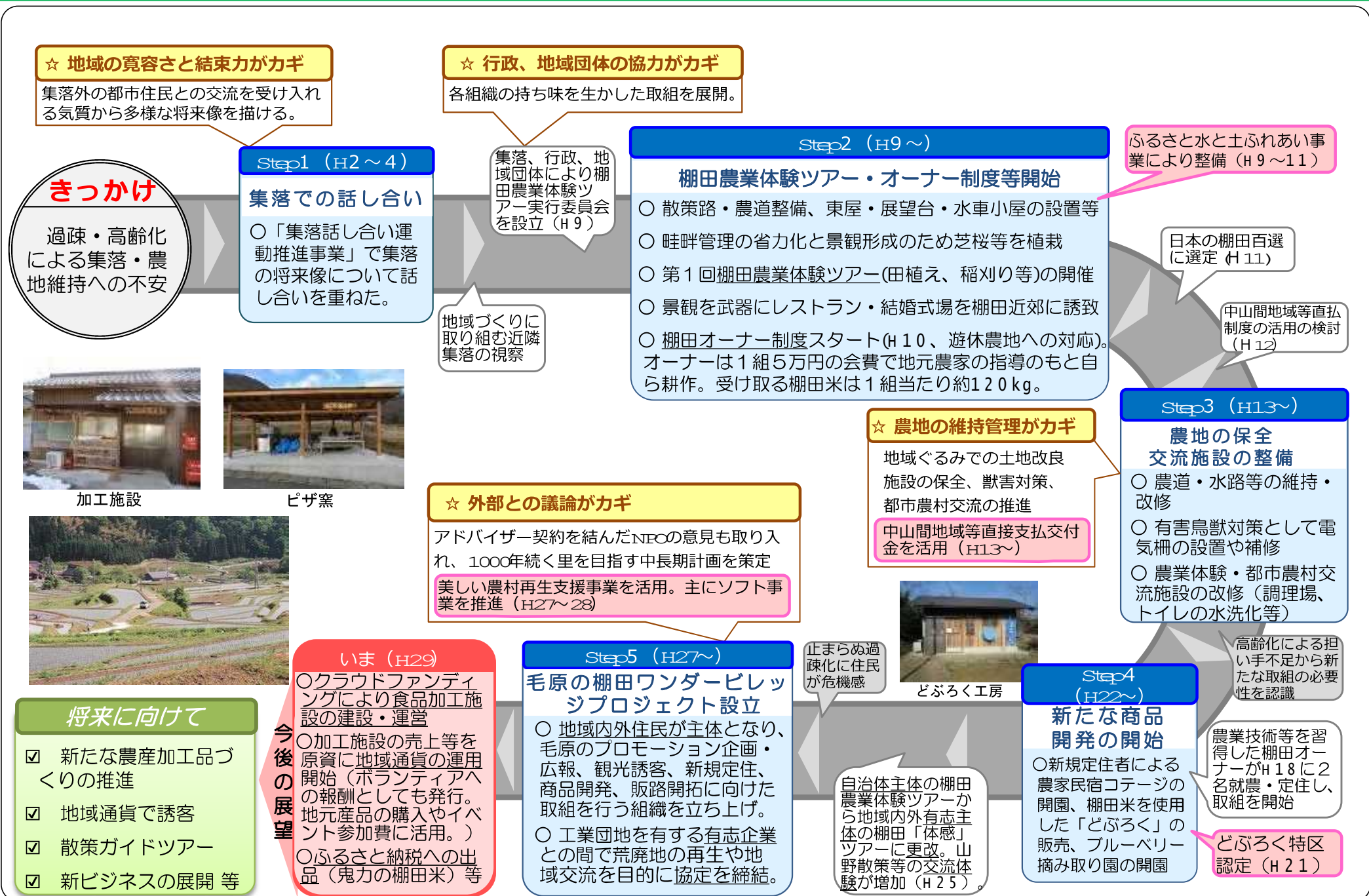
農泊

企業CSR

6次産業化

都市農村交流

【事例】 棚田オーナー制度が新规定住者の就農につながり交流事業が一層活性化





○ 移住者(都市住民)の地道な活動が地域住民の信頼獲得につながり、荒廃した農地が復田。個性と知恵を活かせる魅力的な場所として地域おこし協力隊等の若者が結集し、過疎地域の自立の先駆モデルを目指す。

基本情報

- 所在地：岡山県美作市上山地区
- 総枚数：8300枚（現在復田中）
- 総耕作面積：100ha（現在復田中）
- 耕作率：約30%
- 標高範囲：200～500m
- 平均勾配：19%
- 法面の構造：土羽、石積み
- 開発起源：奈良時代
- 水源：大芦池
- 保全団体：上山区、NPO法人英田上山棚田団、MLAT LLC、一般社団法人上山集楽
- 選定：日本ユネスコプロジェクト未来遺産（H25）、環境省 第2回グッドライフアワード（H27）、第11回JTB文化交流賞（H28）、農水省 第3回ディスプレイ農山漁村の宝（H28）、第3回ジャパン・ツーリズム・アワード（H29）等

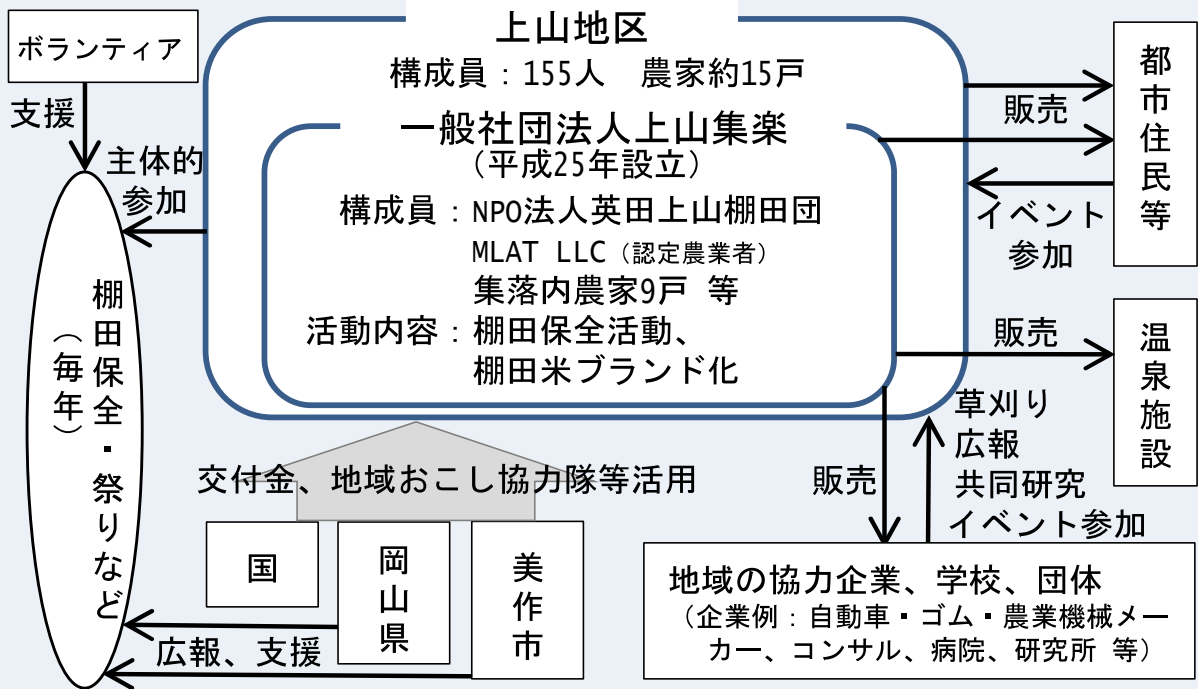


超小型モビリティ

地区の特徴、取組効果

- かつては8300枚の壮観な棚田を誇っていた上山の千枚田。少子高齢化とともに一時は90%以上の棚田が荒れてしまうも、一人の移住者をきっかけに再生活動がスタート。水路掃除から始まった活動は再生面積約20haとなり、活動は農業に限らず多様化。現在は人口155人中40人ほどが移住者となっている。
- 収益性があり、人とめぐみをシェアし、大きなインパクトを与えられる新しいビジネスモデルの構築を目指しており、平成27年に一般財団法人トヨタモビリティ基金の助成により「上山集楽みんなのモビリティプロジェクト」を始動したほか、平成29年からは産総研含む提携企業3社と草刈機開発を行っている。海外の棚田地域（台湾八煙集落、フィリピンキアンガン）とも交流している。

棚田保全をめぐる関係図



キーワード

- 棚田米販売
- 6次産業化
- 農泊
- ソーシャル
- クラファン
- 地域おこし協力隊
- 移住促進
- 都市農村交流
- 地域外との連携
- 企業CSR

【事例】もう限界集落と言わせない！未来につなぐ8300枚の棚田再生プロジェクト



荒廃農地の再生活動

☆ 地域住民との信頼関係構築がカギ

地域住民から村の農法を学び、地道な竹林伐採等で徐々に再生地を拡大。伝統と文化の継承も重視し地域の信頼を得る。

☆ 移住者の個性に委ねた多角的な事業展開（半農半X）がカギ

個性豊かな移住者たちが、放置山林、古民家などの未利用資源を活用し、農閑期に各自主体的に6次産業化等に取り組む。楽しく活躍できる場として移住希望者が更に増加し、経営も安定。

きっかけ

H12、大阪から定年移住したA氏が息子B氏を地域の水路掃除の手伝いに呼び

Step1 (H19~)

英田上山棚田団結成

- B氏が大阪の異業種交流会でメンバーを募り、有志で棚田団結成。
- 月2回の棚田再生活動と週末里山生活を始める。活動は耕作放棄地の草刈りからスタート。

Step2 (H22~)

地域おこし協力隊導入

- 棚田団のメンバーを協力隊に登用したほか、3人が協力隊として移住。移住により再生活動が本格化。
- 不可能だと思われていた景色を蘇らせ、地域住民との関係性も深まる。

Step3 (H23~25)

棚田再生の加速に向けた基盤強化

- 古民家再生※1、棚田大学※2など多方面に事業展開
(※1プロボノやクラファンを活用し棚田再生の拠点となる古民家カフェリノベーション)
(※2 棚田を舞台に自然と調和した暮らしの技術や昔ながらの知恵を実践を通して学ぶ研修)
- ・棚田再生活動を記した本を3冊出版（出版プロジェクト）
- ・国内外の棚田地域（台湾八煙集落等）との情報交換開始
- ・棚田米を“Merry Rice”と命名し、デパート等で販売開始
- 地域おこし協力隊追加導入による移住者増加。地域おこし協力隊によるM L A T※ LLCが認定農業者として再生の中核に。
(※ M m asaka Local Activation Team)
- 棚田団・M L A T・地域住民とで「一般社団法人上山集楽」を設立し、地域での独立を目指した活動を加速する（H25）

古民家利用に向けた留意点：暮参り時の住居・水利用等を契約時に確認し、所有者の不安をなくすこと。

日本ユネスコ「プロジェクト未来遺産」登録（H25）

☆ 古民家を活かしたコンテンツ作りがカギ

棚田同様、見過ごされた地域資源に着目し、日本文化に関心の高い観光客の来訪を促す。

農山漁村振興交付金（農泊推進対策）を活用し滞在型コンテンツを推進（H29~）

Step4 (H27~)

上山集楽みんなのモビリティプロジェクト始動

- 一般財団法人トヨタモビリティ基金の助成により、経済的持続可能性を確保した中山間地域での移動の社会実験として、超小型モビリティ（電気自動車）を導入・改良。
- 日常・農業・観光といった目的での利用実験開始（H28）。



棚田米・日本酒

Step6 (H29~)

農泊事業スタート

- 上山ならではの滞在となるよう、各種ツアー（稲作体験・摘み草）の定期開催、革製品ワークショップ、ジビエ料理提供等、体験型宿泊のための環境整備を進める。

Step5 (H28)

活動拡大

- 地域おこし協力隊追加導入と移住者増加（4人）
- 蕎麦・麦・椎茸栽培、日本酒・ビールの試験醸造、古民家カフェのリニューアル、祭り復活、革製品製造、木工品製造等

今後の展望

将来に向けて

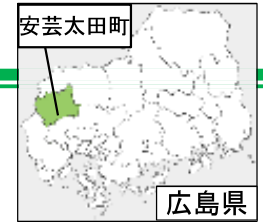
- ☑ 棚田再生エリアの拡大
- ☑ 上山集楽のブランド化
- ☑ 攻めの農業実践家育成事業（ワールドファーマーズプロジェクト）の実施とアジア研修生受入開始

いま (H29)

- 移住者38人、棚田再生面積20ha
- 来訪者の増加
- 棚田大学、イベント、講演会、交流会、展示会、マルシェ等も積極的に実施



超小型モビリティ



○地域おこし協力隊が事務局を担う自主活動組織により棚田の保全活動が活発化している。

基本情報

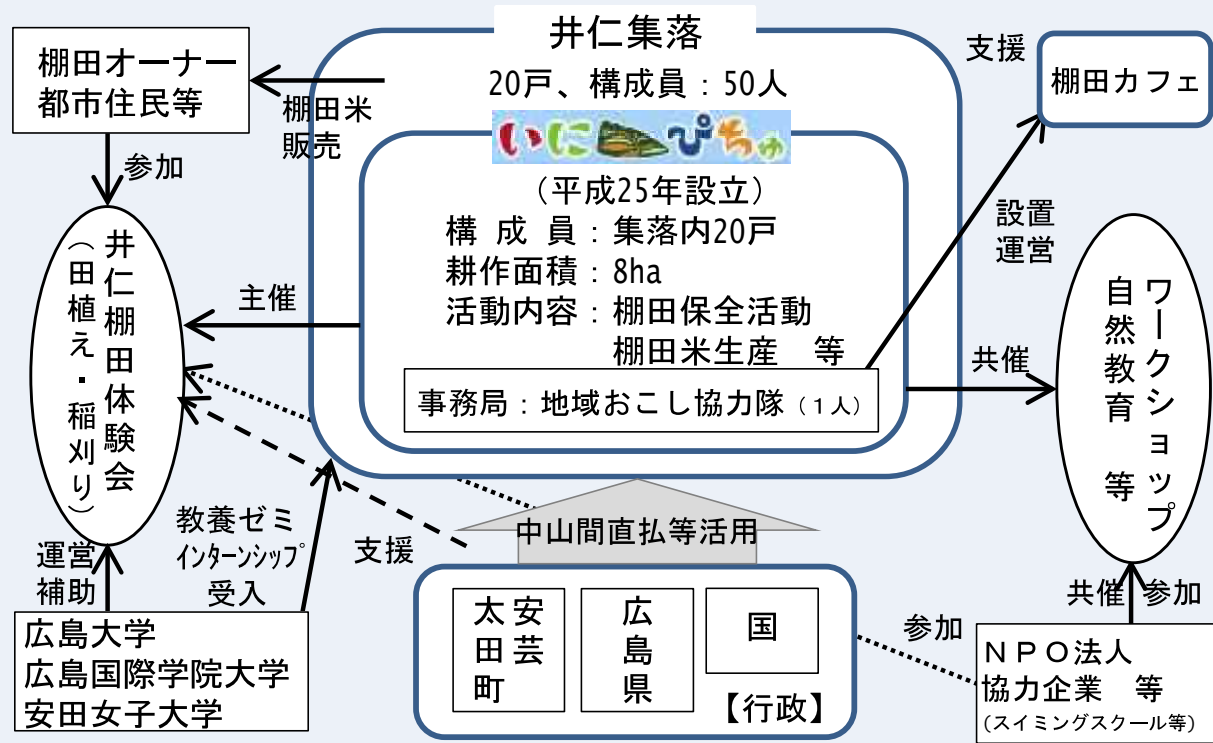
- 所在地：広島県山県郡安芸太田町中筒賀井仁
(広島市中心部から車で60分)
- 枚数：約324枚
- 耕作面積：約8ha
- 耕作率：約85%
- 標高範囲：450~550m
- 平均勾配：1/6
- 法面の構造：石積み
- 開発起源：室町時代後期
- 水源：筒賀川、田ノ尻川（太田川上流）
- 保全団体：いにぴちゅ会
- 棚田オーナー制：7組2.1ha（H25~）
- 選定：日本の棚田百選（H11）、重要里地里山（H27）、日本の最も美しい場所”31選”（H27、アメリカのニュース専門放送局CNN）



地区の特徴、取組効果

- 室町時代後期（約500年前）に整備された石積の棚田を、大学や地域おこし協力隊等と連携して井仁棚田体験会などのイベントを開催するなど、保全活動が定着している。
- 平成27年には、米国CNNの「日本の最も美しい場所」31選に選ばれ、外国人観光客が増加している。
- 平成29年には、地域おこし協力隊が中心となって“棚田カフェ”の建設を進め、不足額100万円はクラウドファンディングで調達した。隊員が店長となり開店し、皆が集える場所となっている。

井仁の棚田保全をめぐる関係図



- キーワード
- 地域内体制整備
- 都市農村交流
- 6次産業化
- 教育
- 学生
- 企業CSR

【事例】 大学や地域おこし協力隊等と連携した都市農村交流活動の展開

☆ 行政（村長）の提案（発言）がカギ

行政（旧筒賀村長）が棚田を活かした地域活性化策を提案し、地域住民が棚田存続に向けて話し合いを始めた。



第1回（平成17年）から「井仁棚田体験会（田植えの部、収穫の部）」に名称を変更

☆ メディア露出がカギ

県内で唯一選定されたことにより、テレビ等のメディアの取材が増加。知名度が上がり、行事の参加者が増加し、活動が軌道に乗った。

きっかけ

「桃源の里井仁」づくり基本構想の策定
(平成9年11月 旧筒賀村)

- ・地域の過疎化・高齢化
- ・猪等の獣害による生産意欲の減退
- ・棚田の維持管理が困難

Step1 (H10~H12)

棚田地域等緊急保全対策事業の実施

- 獣害対策として、集落周りに獣害防護柵（約4km）を設置。（既存のトタン板から金網に変え、景観にも配慮）
- 農道の新設・改良により、生活環境の改善及び棚田の維持管理労力の節減を図る。



棚田体験会（田植えの部）

Step2 (H11.6~)

棚田まつりの開催

- 地区住民が主体となって開催。
- 広島市中心部から1時間弱の立地を生かし、都市農村交流を展開。
- 昔ながらの田植え等の体験や学習の場として地域を開放。

日本の棚田百選に選定（H11）



旧筒賀村が整備

☆ 地域おこし協力隊の活動がカギ

隊員自ら「いにびちゅ会」の事務局として行事の参加者を受け入れる体制を整え、各種団体と連携したイベントも運営。現在2代目。

多面的機能支払交付金を活用し、石垣補修や畦畔草刈り等を実施（H26~）

Step3 (H14~)

展望台・休憩所・案内看板の設置

- 下から見上げる位置に丸太組の展望台を設置。
- 棚田の説明看板も設置し、観光客から好評を得ている。



棚田カフェ（イニミニマニモ）



馬耕体験会

農山漁村振興交付金を活用し都市農村交流を推進（H27~）

Step4 (H22頃~)

大学・企業等との連携

- 地域の大学生が井仁棚田体験会の運営補助や石垣清掃、草刈り等を手伝い、ゼミも実施。
- 環境NPOや地域のスイミングクラブが、子供のための自然教育やワークショップを開催。



女子大学生による石垣清掃

Step5 (H25~)

自主活動組織の発足

- 自治会の中に、地域自主活動組織である「いにびちゅ会」を発足。
- 棚田オーナー制度を開始。
- 休校となった井仁小学校を「井仁棚田交流館」にリニューアルし、交流時の着替えや簡易宿泊所として活用。
- 子育て中の女性を中心とした「森のようちえん」や、野草を採取して食べる「野草の会」等を共催。

いま (H29)

- 棚田体験会、馬耕体験会、野草の会、大学インターンシップ、オーナー制度等を継続実施。
- 棚田カフェを開設【H29.9】（内装はDIY。不足額はクラウドファンディングを活用し、資金調達と同時に棚田をPR。）

今後の展望

将来に向けて

- ☑ 持続的な保全活動
- ☑ 営農を継続していくための負担軽減、労力確保
- ☑ 地域にお金が落ちる仕組みづくり（特産品づくり）



○集落の結束を活かした棚田保全事業の地道な取組により、イベントへの来訪者は年々増加。行政の支援や制度を活用することで棚田米のブランド化やイベントの活性化につなげている。

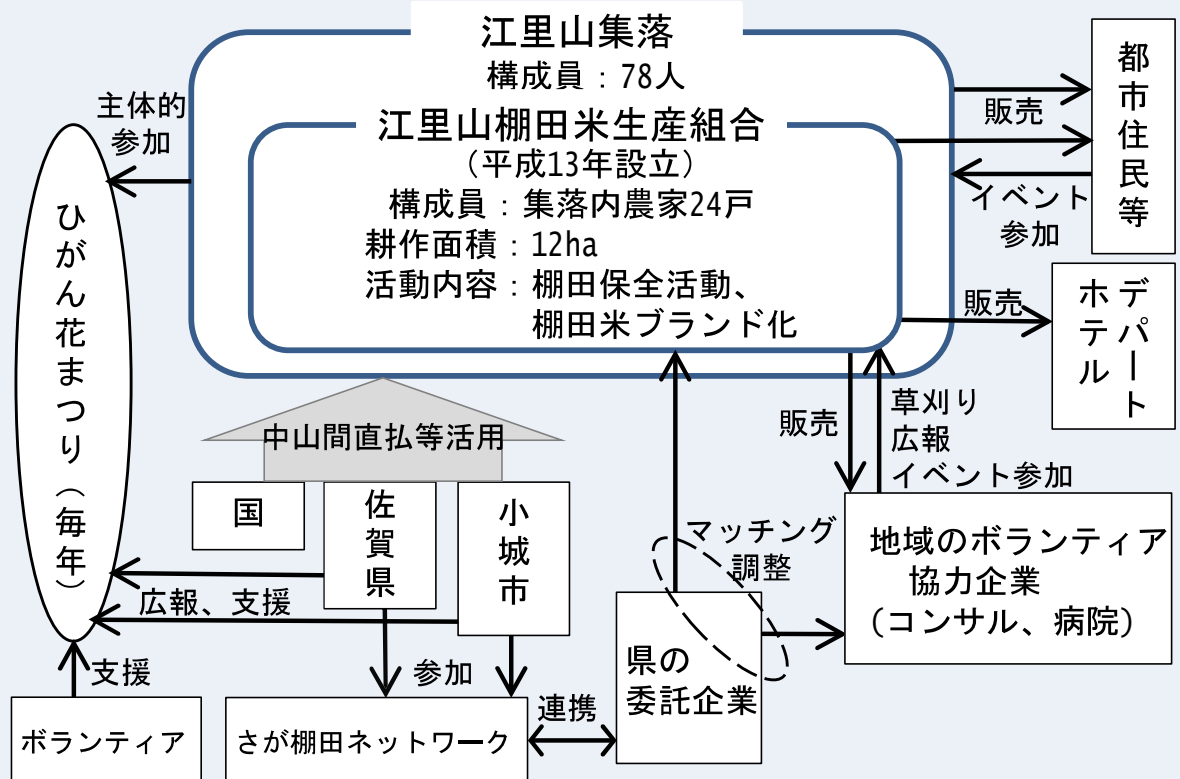
基本情報

- 所在地：佐賀県小城市小城市岩蔵 (小城市から車で10分)
- 枚数：約600枚
- 耕作面積：約12ha
- 耕作率：約80%
- 標高範囲：170～250m
- 平均勾配：1/5 (ord / 10)
- 法面の構造：土羽、石積み
- 開発起源：中世
- 水源：江里山川
- 保全団体：江里山棚田米生産組合
- 選定：美しい日本のむら景観百選 (H13)、日本の棚田百選 (H11)、22世紀に残す佐賀県遺産 (H20)、重要里地里山 (H27)

地区の特徴、取組効果

- 昔ながらの狭隘で不整形な石積み景観を維持し、群生する彼岸花を「ひがな花まつり」にあわせて地区いっせいに咲かせることで、集落の一体感とのかな里山の空気を感じることができる。小城市の重要な観光資源として、1日の来訪者数は、H23の600人からH29は1200人にまで増加している。
- 米は棚田米として集落で管理し、独自の販売ルートにより2,700円/5kgで直売。H28年産米の出荷実績は6ト。

江里山の棚田保全をめぐる関係図



キーワード

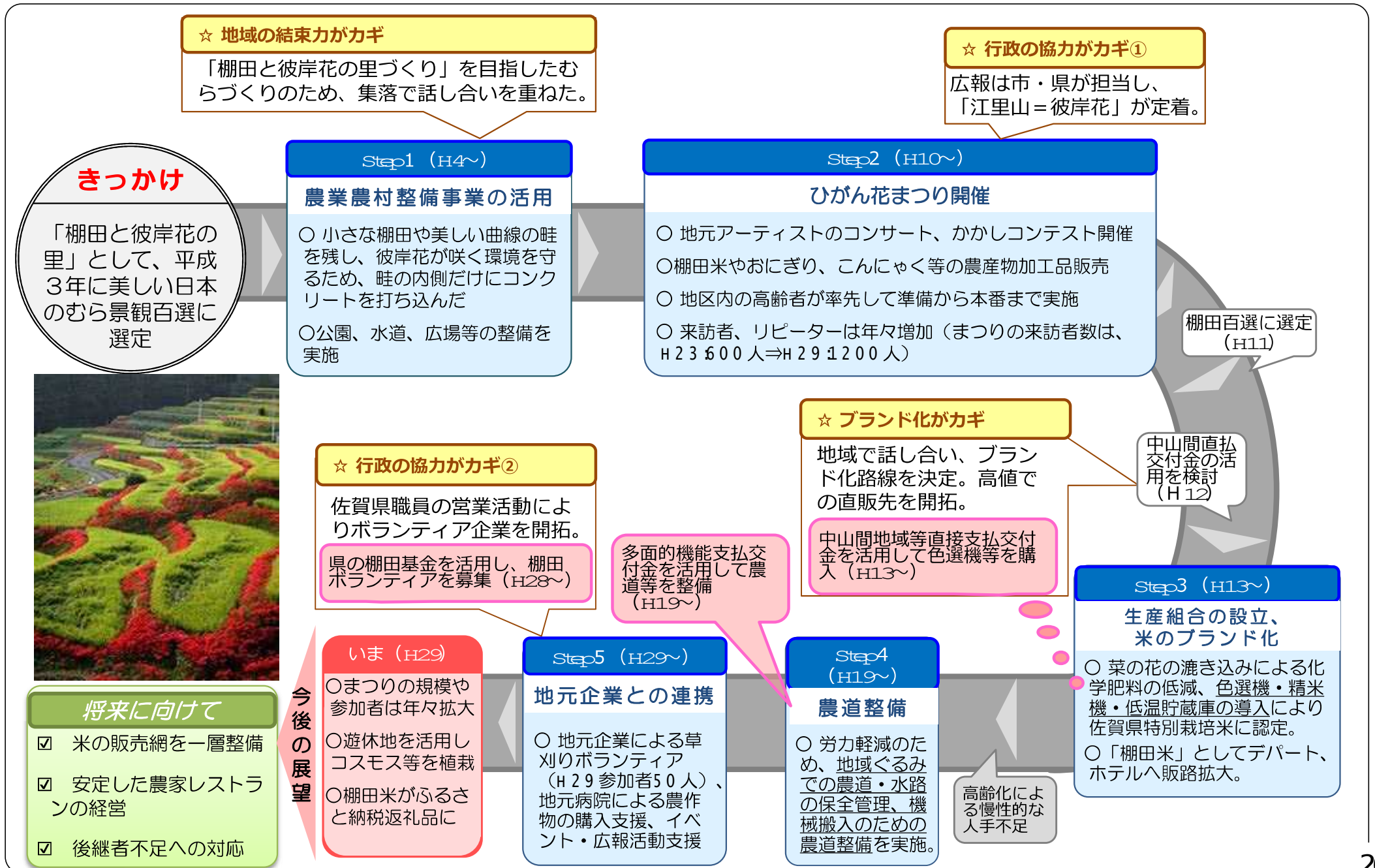
地域内
体制整備

都市農村交流

棚田米販売

企業CSR

【事例】集落の結束と行政の協力によりイベントの集客増加、米の販路拡大に取り組む





○組織化を通じて棚田米のブランド化に成功。景観を活かす棚田保全事業は集落ぐるみの取組から地元の大学や企業の支援を受けた取組に発展し、都市住民との多様な交流につなげている。

キーワード

地域内
体制整備

棚田米販売

学生

教育

都市農村交流

企業CSR

6次産業化

基本情報

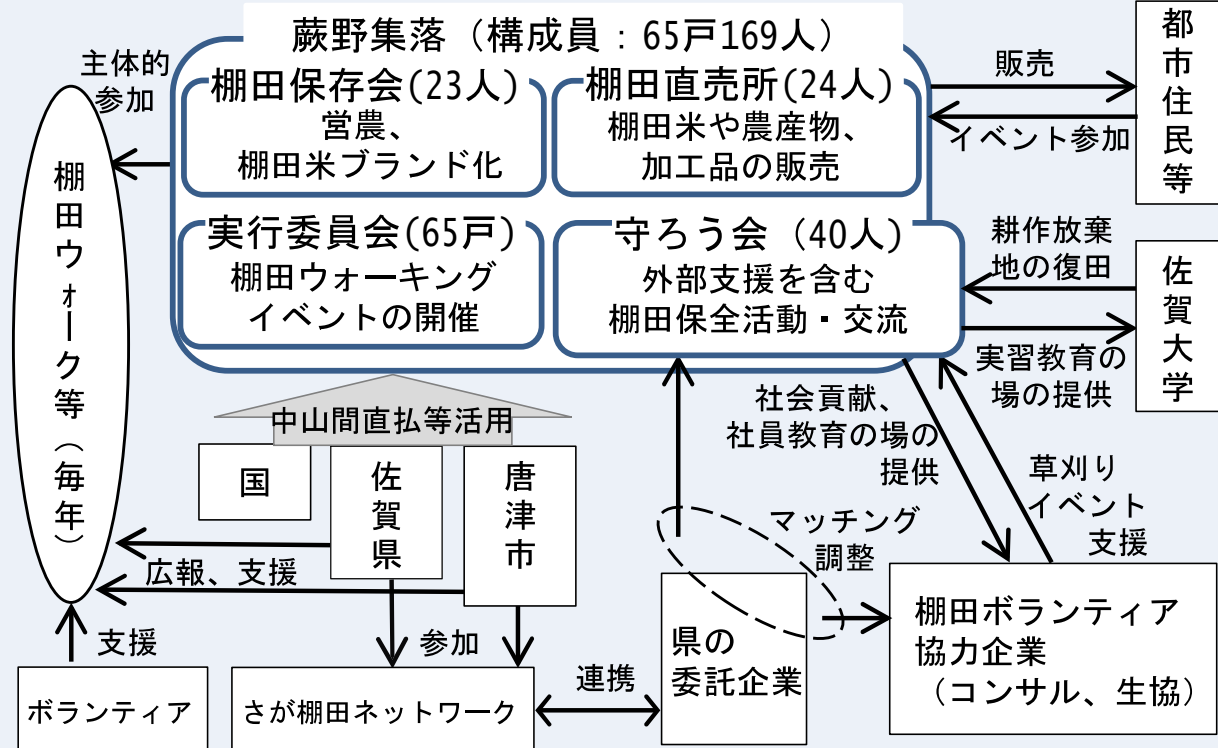
- 所在地：佐賀県唐津市相知町平山上
からつし おうちょう ひらやまかみ
(相知駅から車で15分)
- 枚数：約700枚
- 耕作面積：約33ha
- 耕作率：約88%
- 標高範囲：130~400m
- 平均勾配：1/4
- 法面の構造：石積み
- 開発起源：江戸時代初期
- 水源：平山川
- 保全団体：①蕨野棚田保存会、②蕨野棚田直売所、③棚田と菜の花実行委員会、④NPO法人蕨野の棚田を守ろう会
- 選定：日本の棚田百選 (H11)、日本遊歩百選 (H14)、重要文化的景観 (H20)、重要里地里山 (H27)



地区の特徴、取組効果

- 棚田の規模が大きく高さ8.5mの高石積を有し、「国の重要文化的景観」にも選定されている蕨野の棚田を活かした地域づくりを推進するため、地域住民の団結で集落ぐるみの取組が実施され、大学等の外部支援を受けた交流イベントも開催されている。
- 米は棚田米としてJAカントリーにて他地区と区分管理し、低温乾燥調整や注文に合わせて精米出荷販売する体制を確立し、3,150円/5kgで直売。H28年産米の保存会販売実績は23.8t。

棚田保全をめぐる関係図



【事例】 棚田の魅力を活かす地域ぐるみの交流促進で棚田米のPRと地域活性化に取り組む



☆ 地域の結束力がカギ

「棚田」を活かした地域づくりを進めようという思いから、**地域住民の団結力**で集落ぐるみの取組が生まれた。

☆ 棚田米のブランド化がカギ

地域で話し合い、生活雑排水が一切入らない棚田米の魅力を生産者に伝える体制を確立し、販路を開拓することにより、稼げる仕組みを作った。

中山間地域直接支払交付金を活用し、**棚田米パッケージ**を製作し、**共同利用機械**を購入 (H12~)

きっかけ

美しい農村景観を有するものの、高齢化、担い手減少により、耕作放棄地が増加

日本の棚田百選に選定 (H11)

Step1 (H13)

棚田保全組織の設立と棚田米のブランド化

- 町主導で地域活性化に向けた交流事業を担う「棚田と菜の花実行委員会」を設立。「第1回早苗と棚田ウォーク」を開催したところ、**900人もの都市住民**が来訪。地域住民は驚くとともに、お米を参加者に売りたいとの意見が出るようになる。
- 住民有志で営農や棚田保全を担う「**蔵野棚田保存会**」を発足。品質とパッケージを統一し、「**棚田米蔵野**」販売開始。棚田の良さを体感したイベント参加者から多くの注文があり自信に。町長の**トップセールス**でデパートや有名ホテルにも販路を拡大。

特別栽培米の認証 (H15)

佐賀大学と地域交流協定を締結。耕作放棄地を実習田とするなど**年100人の援農隊**を受入れ。(H15)

Step2 (H14~H18)

交流拠点の整備

- 棚田サミットや交流事業の推進に向けて、農産物の販売や来訪者への案内を行う**直売所**を建設
- 直売所では地元の女性が活躍
- 里地棚田保全整備事業を活用し、**交流広場や展望所**等を整備
- 中山間地域直接支払交付金を活用し、**直売所**を整備 (H16)

全国棚田サミット開催 (H16)

重要文化的景観に選定 (H20)

☆ 外部からの支援がカギ

- 資金面、人材面で地元企業等から助成。
- 県の基金で**棚田ボランティア**を募集 (H28~)
- 中山間直払や市の助成を**イベント経費**に活用

☆ 外部支援を受け入れる体制整備がカギ

地元大学等多様な主体が地域住民と協力して交流イベントを開催する体制を構築。

いま (H29)

- 米のブランド力向上
- 3企業と協定締結
- 直売所には年間**2,600人**来訪。煎餅等米加工品も販売。一部住民は農泊、そば処にも着手。

今後の展望

将来に向けて

- ☑ 後継者不足への対応
- ☑ 継続したイベント開催に向けた体制整備

Step5 (H24~)

企業等の支援

- 連携企業の社員等による草刈り、イベント運営の支援を受けるほか、稲作体験教室も実施

Step4 (H22~H25)

棚田保全整備

- 営農継続に向けた**労力軽減**のため、畦畔をコンクリートにて補強
- **農山漁村活性化プロジェクト**支援交付金を活用

Step3 (H21~)

NPO法人の設立

- 重要文化的景観の選定を契機に「**NPO法人蔵野棚田を守ろう会**」を設立し、地域住民が主体となって棚田や里山の保全、交流事業を実施
- 地域住民、佐賀大学卒業生等で構成



○ 地域資源の見直しと地域内体制整備により、女性や若者が生き生きと6次産業化に取り組み、滞在型グリーンツーリズムも大成功。若者が自然と集まり、限界集落の未来をつくるモデル地域となっている。

基本情報

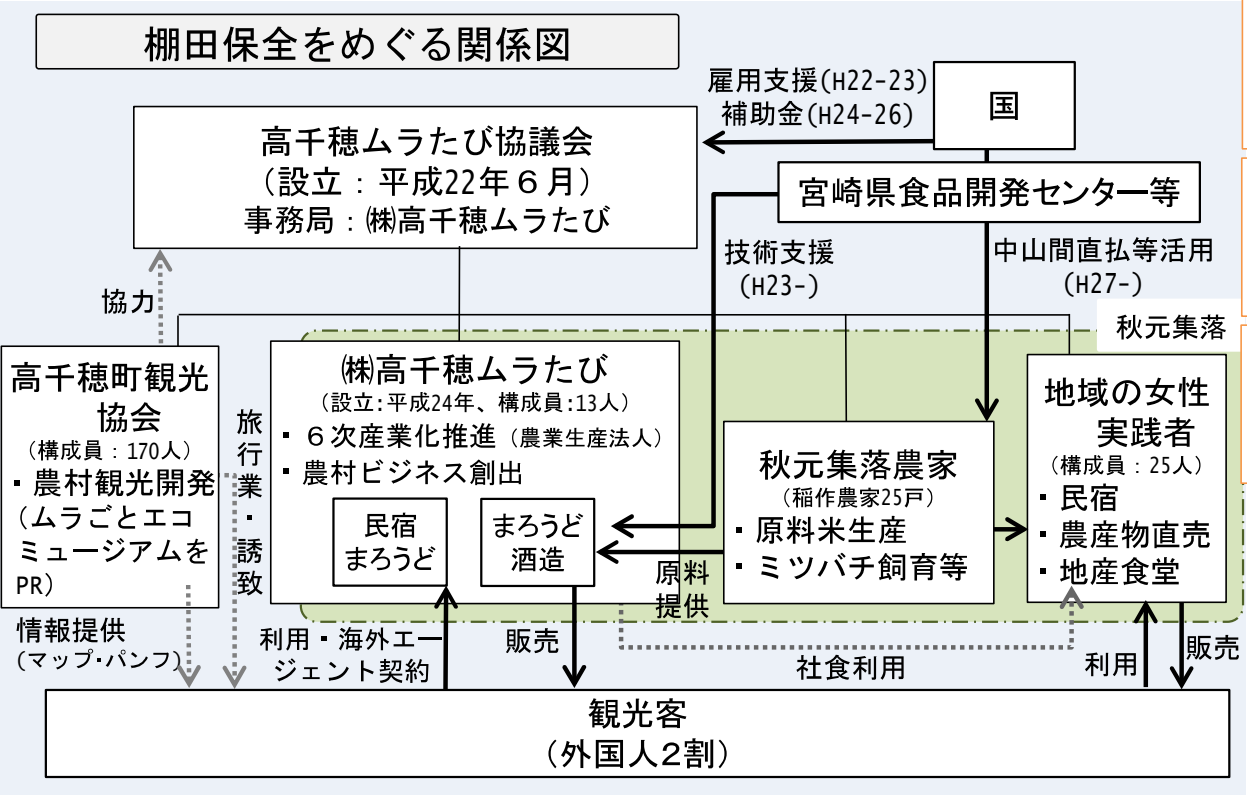
- 所在地：宮崎県にしうすきぐん たかちほちょう むこうやま西臼杵郡高千穂町向山
(高千穂町中心部から車で30分)
- 枚数：119枚
- 耕作面積：約4.3ha
- 耕作率：約100%
- 標高範囲：500m～600m
- 平均勾配：1/6
- 法面の構造：土羽
- 開発起源：不明
- 水源：諸塚山(湧水)
- 保全団体：高千穂ムラたび協議会
- 選定：世界農業遺産認定地域内(H27、高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム)、第3回ディスカバー農山漁村の宝(H28)



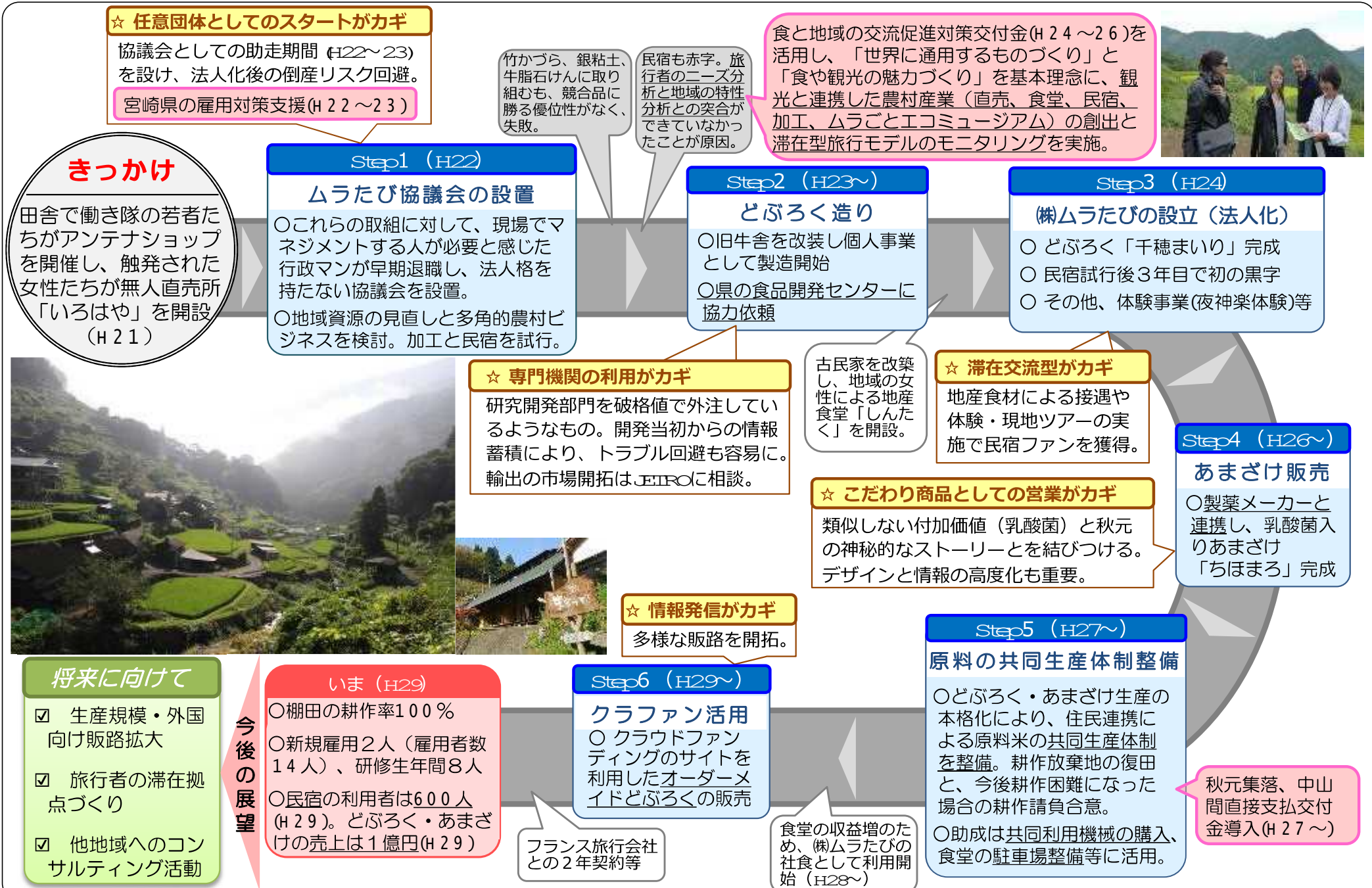
地区の特徴、取組効果

- 人口100人のうち60歳以上が7割の限界集落にありながら、①棚田を中心とした農村景観や地域の神話史跡を活かしたムラづくり(ムラごとエコミュージアム)と、②地域の女性たちが運営する古民家食堂や民宿で希少な地産食材を提供することで、年間3万人以上の交流人口を創出している。
- 移住者を含む若者が中心となった(株)高千穂ムラたびでは、集落農家と共同で原料米の供給体制を構築し、高値で買い取った棚田米から、専門機関と連携してどぶろく・あまざけを生産し、約1億円の売上から雇用や地域還元の域内経済循環を創出している。

キーワード
地域内体制整備
ソーシャルビジネス
都市農村交流
移住促進
地域協力隊
6次産業化
クラファン



【事例】 中間支援組織の活用と情報の分析で集落に全員参加型の生業を創る



【棚田教室①】 オーナーが助けてくれることって多いよ



①

棚田での作業ってほんとに大変。おじいちゃんたちにこれ以上の負担はかけられないし、残念だけど上の方から枚数を減らしていくしかないのかしら。

作業の担い手に困っているなら、オーナー制度をやってみるのも手だよ。素人といって侮るなかれ、猫の手以上の力を発揮するよ。

②

うちみたいな田舎に、オーナーなんて集まるのかしら。

都会の人には田舎の日常が魅力的なんだよ。それにオーナーは一人では来ない。家族やお友達、同僚と一緒に来るのが普通なの。だから、オーナー組数の数倍の賑わいになるんだよ。

※ 事例 6 (大山) 等

マスコミ関係者をオーナーにすれば情報を発信してくれるよ※。次年度のオーナー募集が楽になるよ。

登場人物

【なやみん】



生まれ育った田舎の風景を守りたい地元農家の娘。昨年から棚田での営農に従事。「守り隊」に悩みを打ち明けます。



等々

【棚田の中から守り隊】

棚田に住む、棚田博士（早稲田大学名誉教授の中島先生）の教え子たち。「なやみん」の悩みを聞いて、皆でアドバイスをします。

ルール

「棚田教室」は、なやみんの悩みに守り隊（棚田に住む生き物たち）が答える漫画形式（3～5コマ）で構成しています。ページごとにテーマを分けているので、関心のあるタイトルのページからご確認ください。事例集の事例に言及する際は※印で出展を付しているため、事例集の逆引きとしてもご覧いただけます。

③ ちなみに・・・



※ 1 事例 6 (大山) 等
大都市からアクセスの良いの棚田では、週末に通いたいオーナーさんが多いから成功しやすいよ。体験学習で収入を増やしているところ※¹や本格的な耕作を指導するところ※²も出てきているから、ぜひ取り組んでみて♪

※ 2 事例 5 (寺坂) 等

※ 事例 4 (白米)・7 (板折) 等

近くに大きな都市がないところは、最初から作業の担い手として期待するのは難しいかもしれないけれど、ライトな農業体験や交流を通じて少しずつファンを獲得※¹していけば、きっと地域の将来につながる収穫があるよ。

